研究雑話(56)
人間発達の物質的基礎(二〇):コトバと叙述(五)、素材や道具への定位(外言による内言化)

藤井力夫

前回は、Aちゃん(三歳三カ月)の歌う「げんこつ山の狸さん」を例に、フレーズの生成における「付属語」の役割についてお話しました。／・・**の**・・**さん**、・・**で**・・**て**、・・**て**・・**て**、**また**・・**た**／等。音高を少し下げたり、上げたり、同じ高さを維持したりして次のことばを繋げていく。拍節二音のリズムのなかで次の拍節を引き出す媒介項、ないし次の拍節への内発的な要求としての「間」や終止感。そうした役割を担っていると言えるでしょう。「自立語」に対して、「付属語」というとき助詞や助動詞だけですが、接続詞や疑問の副詞なども含めて考えてみました。フレーズ生成の媒介項としての側面、幼児におけることばの引き出し方を観察するとき、こうした見方も成立するように思います。江戸期の文法論にはこうした立場の国語学者(鈴木朖)もいたようです。

今回は、「木の家」と「木で家を」の違いをめぐってお話したいと思います。(図A)。「の」ではなく、「に」とか、「へ」、「と」、「から」、「で」。これらを自由に使えるためには六歳近くにならないと難しいようです。「木の家をつくりました」とは言えるのですが、「木で家を」とはなかなか言えない。なぜでしょうか。かって、絵本・『三匹の子ぶた』を使って調査したことがあります。黙って考え始める子どもが、これらを表現。「で」とか「から」とか、これらの使用はことばを内言として利用できることを意味します。

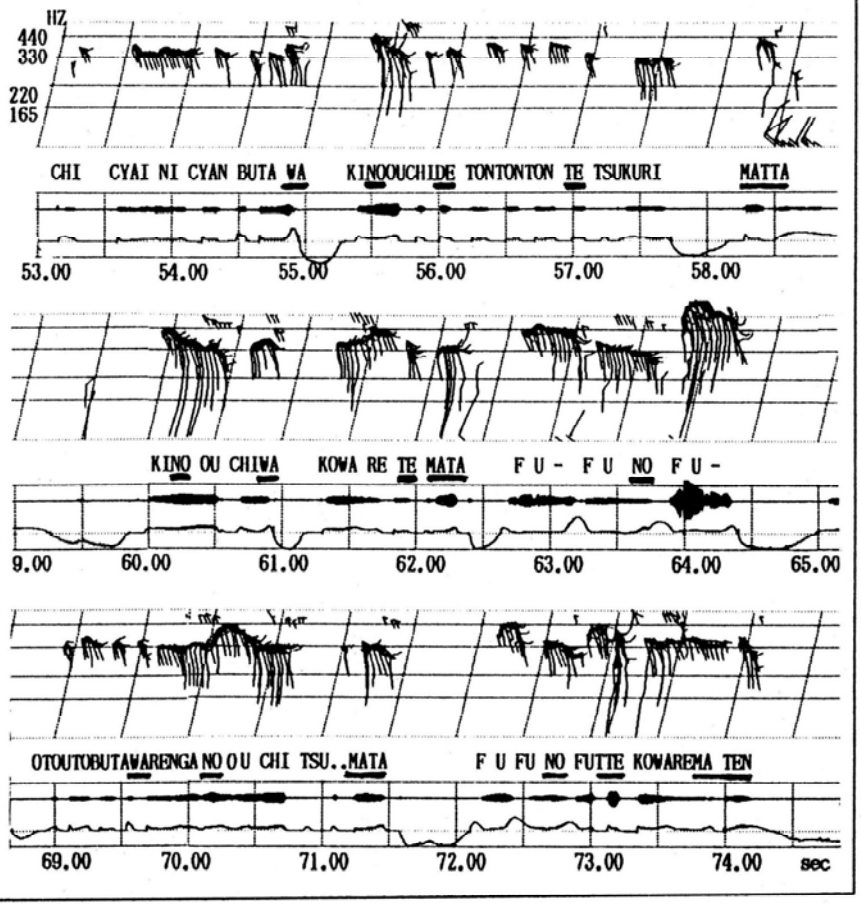
図Bは、絵本・『三匹の子ぶた』を読み聞かせた後、子どもに順番に場面を見ながら話してもらったものです。図の見方は前回と同じ。音声波形の下に呼吸曲線を付加。障害児学級の小学二年生(八歳一カ月)の男の子の再生話。とても絵本が好きな子どもです。／き**の**おうち**で**／と、前の場面で／わら**で**／の表現を勉強したものですから、こんな表現になっています。

ところが、この後、次のように言います。／トントントン**て**／／つくり**ました**／と。これはとても大事なことです。場面における動作内容の補足。状況を説明しているのです。が、「**で**」と「**を**」、同時に使って線的に叙述できるまでにはなっていません。／ちっちゃいにいちゃんぶた**は**／と、主格・「**は**」は使えます。音高を少し下げ・／**は**／と間を作り、吸気に入って・／き**の**おうち／と繋げます。音高を下げれば／**を**／ですが、音高を上げたので／**で**／と誤用してしまいます。が、音高を上げた連続感が／トントントン**て**／と説明に入れやすくします。そして／つくり／／**まった**／で終わります。助動詞・／**ました**／が／**まった**／。／**まった**／の手前で吸気。これが終止感を強めます。材料や道具に定位し、喋らずにはおれない。内言への大事な土壌です。

(北海道教育大学教授)

A.「に・へ・と・より・から・で」(格助詞・補語用)

ちっちゃい 兄ちゃん ぶた は、(木で)(家を) つくり ました。

((木の)(家を) つくり ました。)

B.絵本再生話時・音声スペクトル(Bくん、男、小学2年生)